

「コロナが教えてくれたこと」

鹿児島市立喜入小学校 五年

岩元 いわもと

大知 たいち

「きつい。」

一学期のある日、ぼくは頭がいたくなつたので、保健室に行きました。体温を測ってみると、熱はありませんでした。そのため給食を食べに教室にもどり、給食を食べると元気がなり、元気いっぱい昼休みに遊びました。しかし、遊んでいるとまた頭がいたくなつてきたので、保健室に行きました。体温をはかってみると、今度は熱がありました。ぼくは、さつきまで平熱だったのにとびっくりしました。保健室のベッドにねていると、お父さんがぼくをむかえに来てくれました。

家に帰ってくるとすぐに、自分の部屋に行つてねました。三十分ぐらいねました。起きて体温をはかってみましたが、あいかわらず熱は高いままでした。ぼくは、新型コロナウイルスにかかったのではないかと心配になりました。

次の日、PCR検査を受けに病院へ行きました。検査結果を待つ間、ぼくの心臓のどきどきは止まりません。結果は、陽性でした。

その日から十日間の自宅待機が始まり、始めて一人でご飯を食べるといふ経験をしました。おいしいはずのご飯が、家族のみんなと食べられなかったもので、なんだかおいしくなく感じました。ご飯を食べ終わって、ひまな時間がやってきました。するとお父さんが、お仕事の帰りにマンガを買ってきてくれました。マンガのおかげで、今までひまだった時

間がなくなりました。しかし、あつという間に全部のマンガを読み終えてしまいました。

そのため、何度も何度も読み返しました。その後、五日間で平熱にもどり、七日間でだるさがなくなり、食欲も出てきました。そして自宅待機最終日、ぼくは明日のことを考える

とわくわくしてきました。「明日は家族といっぱいお話ししよう。」「明日のご飯は楽しみだな。」「など、いろいろなことを考えながらねました。

次の日、リビングに行き、「おはよう。」

と言いました。家族との久しぶりの再会です。みんなと食べる朝ご飯は、今までで一番おいしいと思えるご飯でした。

最後に、とてもきつくてひまで、もう二度とかかりたくない新型コロナウイルスですが、新型コロナウイルスがぼくに教えてくれたこと

とが一つあります。それは、何げない日々の幸せです。学校に行つて友達と会うこと、家族といっしょにご飯を食べること、宿題や習い事でいそがしいことは、コロナにかかる前までは普通のことだと思っていました。しかし、コロナを経て、これらはとつても幸せなことなのだと思付きました。よってこれからはこの幸せを守るためにも、今まで以上に手洗いや手指の消毒、マスクの着用を心がけようと思います。